

藏経所収のそのうちの約八〇%近くを占めている。それに比べて密教の経は僅か約二六%にしか達していない。論は経ほど多く訳されていないが、密教のものは極めて少い。密教の経論はランダルマ王 *Glas dar ma* (在位八四一年—八四六年) の廃仏以後に多く訳されたといわれるのは正しい。それにしてもこの目録に記されている経論の数が多いため、仏教が全盛であったレバチェン王 *Ral Dar can* (在位八一五—八四一年) 時代に訳された経論が少いことにならざるは理解し難い。また八〇〇年頃は、チデソソツェン王即位直後で廃仏が行われていたし、外は唐との戦いに敗色覆い難く、内外多端な時代でもあったから、八二二年の編纂と見做す方が妥当ではなからうか。尤もこの目録には後代の附加がある。例えば、レバチェン及びランダルマ王時代の法成 *Chos grub* による漢文よりの重訳の名が記され、また第一世紀の訳と思われる大般涅槃經の重訳などが収められている。したがってこの目録の取り扱いに注意を要するが、しかし後代の附加は少数と見るべきであろう。そうするとこの目録に出ている多くの主要な頭教の経論は、第八世紀後半のチソソツェン王の時代に、厳密にいうと寧ろ王の晩年頃から第九世紀初頭へかけて翻訳されたものといえる。

## 律蔵にあらわれたる正法久住の精神

佐々木教悟

現存諸律の経分別広説、すなわち戒経広説のところに、十句義 (*dasā abhavaṣo*) のために学処 (*sikkhapada*) を制する旨が説かれていられる。四分律によれば、それは各戒条の下にかかげるといふ仕方が説かれているから、律の学処はすべて十句義に縁りて (*Paṭi-*  
*ṣo*) 制定されたものであることはあきらかである。その十句とは、  
(1) 僧を撰取す(2) 僧をして歓喜せしむ(3) 僧をして安樂ならしむ(4) 未信者をして信ぜしむ(5) 已信者をして(その信) 増長せしむ(6) 難調者をして調順せしむ(7) 慚愧する者をして安樂を得せしむ(8) 現在の有漏を断ぜしむ(9) 未来の有漏を断ぜしむ(10) 正法をして久住することを得せしむ、というものである。

この十種の利益(僧祇律)に関しては、パーリ律と五分律とは比較的によく一致するが、他律にあっては若干の相異がみられる。いま問題とするのは第(10)の正法久住の項目である。パーリ律では、それは項目(9)にあげ、項目(10)は律を愛重するために (*Vināyanugga-*  
*hava*) としている。五分律では、正法久住を同じく項目(9)にあげ、(10)は分別毘尼梵行久住故としている。そしてここにかかげられた正法久住と梵行久住を、四分律以下の他律では、両者のうちのいずれか一つをあげる方法をとっている。すなわち四分律と僧祇律とは正法久住をあげて梵行久住をあげない。十誦律と根本有部律とは梵行久住をあげて正法久住をあげない。

ここでとくに注目されるのは摩訶僧祇律の項目(10)である。この律のみは正法久住をあげるに際して、「正法をして久住するを得て諸天世人の為に甘露の施門を開かんが故に」とのべている。これはひ

じように積極的ないあらわしかたであり、釈尊の根本の精神が表明されているものとみられる。律蔵の小品には「甘露の門は開かれたり。耳あるものは聞け。自己の(誤まれる)信を棄て去れ。梵天よ、害あるべきを思い、人々に微妙の正法を説かざりき」とのべてある。この心境は、もとより「生已に尽き、梵行已に立ち、所作已に弁じ、さらにかかる状態に還ることなし」(DN.1, p.167)という自覚に裏付けられたものにして、そこに、梵行已に立ち(Brahmacariyān katam)といわれているから、世尊は梵行者(Brahmacārin)であつたとかんがえられていたことは明瞭である(Milindapañho p. 103-)。梵行が出家者にとって欠くべからざるものであるとされたことは、受戒制度の中に、世尊が比丘の僧伽加入を許された際の「来れ比丘、わが法の中に於て、快よく自ら娛樂し、梵行を修して苦原を尽せよ」なる語が証明している。そこで、正法が説かれるということと梵行を修するということが、法久住のための要件であるとかんがえられたのである。

おもうに、仏弟子たちにとって、その生活規範としての波羅提木叉は、梵木修習のために欠くことのできない学処であり、正法の生命ともいうべきものであった。この点から、十句義の第十番目の項目に関して、僧祇律の述べ方は重要であり、注意せられてしかるべきものがあるとかんがえられる。

## 燃燈仏について

西尾京雄

一、  
釈尊についてはその歴史性が明にせられて、人間仏陀として、その姓をもってゴータマ仏陀とさえ表現されるようになった。それで、われわれの人間の宗教経験を基として、その外の仏陀や菩薩について人間性を明にすべきでないであらうか。<sup>①</sup>

### 二、

われわれは、現在、釈尊は無師独語によって仏陀となりたまうたという經典と古仙人(漢訳)、過去の正等覺者(正利)によって成道したという城邑(Grāma)経との二種類のものに接するのである。ゴータマ・シッタータは無師独悟とはいへ、父浄飯王、母摩耶によって生をうけ、多くの先人によって求道し成道したのである。

さて、ここで、漢訳の古仙人といひ、巴利伝の過去の正等覺者であるについで、これ等は等々に考えられるものようである。これ等の思想が流れて、巴利伝は大無量寿経の五十三仏となり、漢訳伝は華嚴経の善財童子の善知識の求道歷程となつたものでないか。親鸞聖人は末灯鈔に「釈迦如来の善知識は一百一十人なり、華嚴経に見えたり」と。善知識とは善交の意味でもあり、よく「先立つものは善知識」といわれる、その「先き立つもの」即ち(pubbāka manussa)古仙人、或は過去の正等覺者と考えてよいようである。